着物の生る木

若松　賤子

「裁縫なんて、本当に嫌だこと！　前掛けなんぞ縫わずに、木に生ってるものならいいけど！　ちょっ、本当に……。」

長嘆つくづく、夏子はくけかけた透綾の前掛けを膝の上へ落としました。実は母に言いつけられて、最前からしぶしぶ縫い始めたわけでした。ふと庭を眺めると、背にこぶのある奇妙な顔をした老人が向こうに立っております。おやと思うと、上っ調子なきいきいした声で、

「前掛けの木に生ってる所がありますぜ、わしんとこじゃ、ちょうどこの頃に秋の収穫をするところだ。」

全体なら、見慣れぬうえに奇妙な風采の老人ゆえ、夏子は怖がるはずですが、親切そうな顔してにこにこしている、そのうえ、前掛けの生る木がある話の不思議千万なところから、逃げてゆきもせず、あっけにとられた気味で、

「前掛けの収穫なんて、聞いたことがないわ！」

「そうかね、わしの住まってるほうにゃァ、前掛けだろうが、着物だろうが、帽子だろうが、なにもかもそういうものはここいらの桃と同じこと、木に生ってまさあ。わしが、今着てるこの薄羽織もつい昨日もいできたんだ、嘘だと思いなされァ、軸のついてるとこを見せやしょう。」

またたくまに羽織を脱ぐと、案のごとく、衣紋掛けの紐の通るところに一種異様な軸がくいついておりました。夏子はいよいよ疑われず、

「あたし、そういう木見たいこと。」

「ぞうさもない。」

夏子はいくらか怖くもあって、

「よっぽど遠いの？」

「そうさ、だが、おまえさん指ぬきを親指へはめなすってね、目をつむり、『前掛けの生るてふ国へ行いて見ん。』ということを三たび口の中で唱えてごらんなさい、目を開けないまに行っちめえやすから。」

このとき夏子は縁の柱に寄りかかっておりましたが、納戸になにかしていた母の許諾を得る考えもつかず、教えらるるままに呪文を唱えますと、不思議や！　いつしか見もせぬ土地へ来てしまいました。よくよく目を見開くと、ここは庭かと思われる、植えつけてある木々は、いずれも夏子の夢にも知らないものばかりでした。と見れば、以前の老人は庭づくりの身なりになって、手にじょうろを携えております、そうして、

「さあ、こっちへおいで、前掛けの生ってる所へ連れていくから。」

夏子は導かるるままに、後ろに従っていくと、とうもろこしとも思われるものの作ってある、畑へ出ました。老人は、

「ほら、これが前掛け畑だ。」

言いつつ穂に類したものを一つ折ると、俗にとうもろこしの毛と唱えるものの代わりにまがいもない前掛け紐がぶら下がっておりました。手早に剥く皮の下にはきれいに巻いたものがある、

3【くける】服などの縫い方で、縫いめが外から見えないように縫う。

3【透綾】布地の一種。透けるように薄い絹織物。

1【衣紋掛け】和服を掛けておくための道具。

7【指ぬき】裁縫道具の一つ。縫い物をするときに指にはめて、縫い針の頭を押すのに使う。

7【てふ】「〜という」という意味の古い言い方。

10【納戸】ふだん使わない衣服や道具などをしまっておくための部屋。

これを夏子に渡すと、夏子は実に驚き入りました、まことにみごとに仕立った前掛けがちゃんと畳んで巻き込んでありましたから、夏子は老人の許諾を得て穂を摘み始めましたが、木によって種々様々の前掛けを生じ、赤子のよだれ掛けから、夏子の母に締めさせたいような大きな地味なのまでありまして、摘んで剥くおもしろさには、夏子もほとんど我を忘れるくらいでした。夏子は抱えられるだけ摘みましたが、老人は、

「さあ、まだまだいろいろあるから、こっちへおいで。」

五、六歩も行くかと思うと、向日葵が作ってあるかと思う畑へ出てきました。いよいよそれかと瞳を定めると、なるほど葉は向日葵によく似ついていましたが、花の代わりに軸の先にいちいち帽子が一つずつついておりました。夏子は思わず手を打って、「おやまあ！」と声をたてましたが、驚くもそのはず、実に妙、不思議といってこれほどのことは夢にさえ容易には入らぬくらいです。日に輝く高帽があれば、鳥打があり、麦わらがあればラッコのシャッポもあり、大黒頭巾から兵隊さんのかぶるようなのまでみごとに熟しておりました。夏子は父にかっこうな帽子、兄弟が好ましがる新型の麦わら帽、その他、去年生まれた赤ん坊にまでかわいらしいのをお土産に選んで、さてそれからリボン畑へ行って帽子の飾りを見つけようとしますと、なるほど、できておりました、美しくできておりました、とんと堀切に花のない頃行ってみたあんばいで、一面リボンの波が打っておりました。もっとも色は様々で、これほどの眺めはどこにあろうと、夏子はまたも嘆息の声を漏らしました。それから着物や帯はどこにと夏子が尋ねますと、案内をするともするとも、帯の木というは、まるで丈の高いしゅろに似ていて、鬱蒼たる葉の影には友禅のふくさをはじめ、西陣、緞子、繻珍、大和錦、博多、繻子、その他ありとあらゆる種類がしゅろの毛のある一つ所に巻きつけてできておりました。夏子は余りのうれしさに息急きして、

11 【鳥打】帽子の一種。ひさしのついた、平たい帽子。ハンチング。
11 【シャッポ】フランス語で帽子のこと。
11 【大黒頭巾】七福神の一人大黒天がかぶっているような、円形で、外側に膨れ出ている頭巾。
12 【かっこうな】ふさわしい。似つかわしい。
15 【堀切】東京都葛飾区にある地域。花菖蒲園が江戸の名所としても知られていた。
18 【しゅろ】常緑高木の一種。茶色の毛で包まれた幹の先に、うちわの骨のような葉がたくさん出る。
20 【息急き】荒い息づかい。

「おじさん、こんな美しい友禅がどうして、日の照るところで褪めないの？」

と言いますと、老人は落ち着いた調子で、

「おまえさん、桜や牡丹を御覧じろ、お天道様が当たらっしたって色が悪くなりますか？」

と言う。なるほどそうであったと夏子は自分が風土の違った所へ来ているに心づきました。

夏子はなおきょろきょろと辺りを見回し、

「あれ、あすこの腹合帯に、そして、あらあのお染帯あんなのはどうしてできるの？」

「あれかえ、なんのぞうさもねえ、接ぎ木ィしたり、朝顔の花ァ二色混ぜてこせえるようなあんばいにするんだ、もう慣れてるからいろいろ風変わりのができやすよ。」

ここでも夏子はたくさんに土産を剥き取ってもらい、最前から老人の用意してくれた小ぎれいな荷車はだんだん重くなりました。どこともなく立ち現れた小僧体のものが、夏子が行く先行く先へ引いてまいりました。さてまた着物はというと、これまでよりいっそう高く、大きな木に生っておりました。老人は春夏冬と三度収穫をするのだと申しました。そうして模様ものなどをよく仕上ぐることずいぶん骨が折れると申しました。襦袢、胴着のような短いものは、着物の生る木の陰でなければできない具合は、洋服畑のチョッキやシャツが外套の木の下でなければ繁茂せぬと同じものだと聞いては、夏子はもはや不審ようやく去って、さもこそと思いました。夏子に随従する荷車は、いよいよ重くなり、夏子も見物するものの多いのと、あれこれと指図するので、いささかくたびれ始めました。それゆえ洋服畑や、着物畑の広大なところはなるべくざっと済まして、さて足袋、手袋の畑へ出ますと、両方とも実におもしろく生っていて、なかでも手袋の木は、とんと紅葉のようで、巾着の生るところは柘榴のようだと夏子が申しました。冬は温かい皮や毛糸のもの、夏は薄い絹のものができる、子供がはめるミッテンス（丸手袋）は

3 【御覧じろ】ごらんなさい。
7 【こせえる】こさえる。こしらえる。作る。
10 【小僧体のもの】小僧のような者。小僧は、商店などに勤めている少年の古い言い方。
15 【さもこそ】「さもこそあれ」の省略。そういうこともあるだろう、の意。
20 【ミッテンス】ミトン。親指の部分だけが分かれた形の手袋。

五本に指の分からない未熟のものをとるのだと老人は説明いたしました。
「ハンケチなんかもありますか？」
と夏子が尋ねると、今そこへ行く道と申します。さてはこのカベヂ（葉牡丹）みたようなのがそれかと夏子はまたしても感嘆はやみませんかった。ハンケチは一ダースずつ一株に巻き込んであって、中に最も全美絶妙なことは、上等向きの縫いのした絹のハンケチには、巻き込んだ芯にいちいち包み袋が添えてありました。
　次に下駄の畑へ来ると、駒下駄、日和下駄、雨下駄、雪駄類、いずれも落花生のごとく、かぼちゃほどの蔓について、熟するまでにはいちいち土の下に隠れてしまう様子でした。夏子はおもしろがって蔓を引き立て引き立てしますと、出てくる下駄は不思議にもきれいで、土の少々ついたところも振れば、みごとにとんと下駄屋の棚から下ろしたると同じことになりました。
　さて世にも珍しきこの畑の広い仕切りを出で、残り惜しそうに夏子も老人のあとに裏門を通ると、ここはどうやら墓場らしいのでした。
「おじさん、ここは誰を葬った所です？」
「これかね、おまえさんの大好きなはさみや指ぬきさ、人じゃありませんよ。この国ではもう不要な物品だから、先頃みんな一緒に集めてお弔いをしちまったわけだ。」
「それはうらやましいね、しかしときどきおじさんここへ連れてきてくれれば、あたしだってあんな嫌な針箱ん中のものはすっかりここへ納めっちまいますよ。今日はおおきにありがとう、さあ、それで、うちへ帰らしてください。」
　老人はこのときなんだか気味悪く、にたにたと笑いだし、
「へへー、おまえさん、帰るつもりかえ、おっかさんに断りもしないでここへ来る人は、家へ帰

3【カベヂ】キャベツ。あとの「葉牡丹」もキャベツの仲間。

さねえというのがこの国の規則だ、おまえさん何とも言わずに来なすったから、帰られようはねえじゃありやせんか？」
　夏子ははっと胸を突きました。今頃はおっかさんがどのように案じていらっしゃるだろう。そうしてこんなみごとなものをたくさんにもらったとて、おっかさんに見せられなければ、なんのうれしきことがあろう。ああ悪いことをした、しんぼうして裁縫してればよかったに、とんだことになっちまったと思うにつけ、老人が急に嫌になり、悲しさ悔しさが一緒になって、大粒な涙がそろそろ落ちかかりました。
　しかし泣きながらも、どうかして家へ帰りたい一心に、必死と工夫すると……にわかに思いつきました、来たときの指ぬきと唱えごとを。それで、老人の隙をうかがって、一生懸命になり、指ぬきを親指へもってきて目をつむるや否、「前掛けの生らぬ国へと行いて見ん。」と、即席修正してやってみました。
　夏子のとんちは不思議にも図に当たって、今度目を開けるとわが家の縁に座って、仕事を前へ広げておりました。老人はどこへか影を隠し、土産を飽くまで積み上げた二つの荷車も消え失せてしまいました。母の許諾を得なかったというかどで、罰をあてられたものか、老人が夏子が大嫌いな返し泥棒という人物と同様なものであったか、夏子にもわかりませんかった。一口にいうと、ここに述べた珍事、夏子がうたたねの夢と断定しても、差し支えないようでした。しかし不思議なことには、指ぬきが親指へはまってありました。間違っても指ぬきがそんなところへ行くはずはありませんが、そうしてみると、全く夢でもなかったでしょうか？

14【かど】罰せられる理由。
15【返し泥棒】人に与えたものを取り返す泥棒。

〈出典『若松賤子創作童話全集』（久山社、一九九五年）〉

【著者】若松 賤子（わかまつ しずこ）
一八六四（元治元）年―一八九六（明治二九）年
教育家、翻訳家、作家。福島県の生まれ。
【著書】翻訳「小公子」、物語「忘れ形見」、詩「花嫁のベール」など